

異なる所なし、唯北面足長く、東北に八湖有、各廻り百餘町、あたり村里有て、湖中に舟を出して漁りす、又山中の一奇也、表口は道嶮にして、砂走よし、吉田砂走は上下道を異にす、先中宮といふに至る、廣野三里也、駒留といふ、是迄は馬も往來す、是より上は木山貳里有り、夫より一合貳合として、合毎に石室をもふけて、風雨の防ぎ、飲食の助とす、高さ六尺餘、方丈計り、中央に地爐掘て木を焚也、氷を外面に置て、其滴りを湯にして飲しむ、五合以上にては一天瑠璃の如く、星の光り手に取計りに見ゆ、正午時より上り、八合の上に至らざれば、あくる曉天の來迎といふを見難し、其八合九合目は嶮岨いふ計りなし、岩角にすがり行に、いかなる剛力のものも、呼吸喘ぎ胸押が如く、一息に三足とは進み難し、絶頂を望むに、頭上に覆ふが如し、爰を胸突といふ、一足を過ては山下に轉んで、再び顧る事なからんかし、扱來迎といふ事、或は小史に、唐土の娥眉山に佛現の事を證として、此山中の事跡も同じとせるは、擔板漢也、彼國にいふ處は、其見る人の影、日暈の中に移る也、故に其人點頭ウツノミば、其佛も點頭といふ、いふかし、日に向ふ人影の、後に移らずして、日暈の中に移るべき理なし、笑ふに堪たり、世に來迎といふも、佛出現とするは論に及ばず、其事實は附録に詳なれば、爰に不載、唯一を述て少き義を解す、先夜明なんとする前、東方の中奥に一筋の白雲、帶を引たる如く顯る、須臾にして地下より紅の日輪傘ばかりなるが、差上る事速也、此時彼白雲、青朱紅紫の粉雲と、變じて春き動く、既に地上一端計りも離ると見れば、光明閃々として再び目を向ひ難し、斯て四方を眺望するに、世界の山岳唯一面の平地の如く見下して、曾て山有とはしれず、西北の方に尖なる山一ツ雲間にあり、山人にとへば、信州駒ヶ嶽なるよしいへり、絶頂の八峯嵯峨と峙より、中は堅氷綴て餘物を見ず、頓て八葉を下山す、草鞋三足を重ねて履、其身を眞直に立ながら砂礫と俱にすべり下るに、一息の間斷なく、僅に一時ならで本の中宮に歸り、此にて草鞋を脱すて、新に履替て、御師の元に歸りぬ、○下略